

キーワード：SNSの利用，画像の取り扱い，他人との違い，ネット環境との付き合い方

I 研究について

1 本校の実態と課題

本校では、自分専用の携帯・スマホを持つ生徒は54%おり、「平日に平均どのくらいネットに接続しているか」という質問に対し2～3時間と答えた生徒が24%で、3時間以上の生徒が14%だった。本校の生徒は「動画視聴・ゲーム」に使用する時間が非常に多く、「動画視聴」に関しては90%の生徒が利用している。1人1台端末配付によって、これまで以上に情報社会で適正に活動していくための資質・能力の育成が必要になる。また、SNS上での画像におけるトラブルも発生しており、職員の中で危機感を感じている。

そこで「情報モラル」に関する教員の校内研修や研究授業はもちろん、普段の授業などを通して、教員そして生徒・保護者の「情報モラル」についての考え方・態度をよりよいものへとしていくことが課題であると考える。

2 年間計画

6月	校内研修①（カード分類比較法）	10月	研究授業①（2学年）
7月	国見小学校【研究授業】参観	11月	校内研修⑤（研究授業②について）
	校内研修②（ルール設定上の注意）		研究授業②（全学年）
8月	校内研修③（リスクの見積もり）		国見小学校【研究授業】参観
9月	2学年授業（ルールについて）	12月	校内研修⑥・教員への意識調査
	校内研修④（研究授業①について）	1月	1年間のまとめ作成

※ 校内研修は、担当者が情報モラル協議会（4月・7月開催）で聞いた内容を伝達する。

II 研究の実際について

1 校内での実践

（1）第2学年 情報モラルに関する事前授業（9月17日）

「ゲームは1日1時間」というルールがあったとします。

Q1：「1日1時間」をやぶってしまうのはどんな時？

- ・友達 ・夢中 ・親がいない ・楽しい ・残り時間
- ・スマホ ・やりたいこと ・試合 ・ストレス

Q2：守るために自分ができる工夫は？

- ・回数 ・時間 ・やらない ・時間延ばす ・時計
- ・実況で紛らす ・フレンド説明しておく ・つけない
- ・アラーム ・罰 ・予定を決めておく

本時は、「ルールの設定」について学習した。情報モラル教育のスタートとして、アンケートを実施し、自分の家でスマホ等の利用に関してルール・約束があると答えたのは63%だった。各家庭のルールは様々で、そのルールや認識の違いについて生徒から驚きの声が多く聞こえた。

また、ルールを決めることだけを意識するのではなく、「そのルールを破ってしまいそう なときとは?」「守るためにできる工夫は?」という点について考えさせることを通して、 自分事として考えられるように授業を行った。

(2) 3 学年 SNS 上での画像の取り扱い (カード分類比較法) についての授業 (10月20日)



本時は、LINE と静岡大学が共同で作成した資料を用いて行った。5 種類の画像について、SNS に投稿してもよいかどうかを生徒が判断し、その判断基準を話し合った。友達の意見を聞いて、自分では気付かなかった部分を自分事として捉え、メモを残す生徒も見られた。

また、授業中の生徒の様子では「画像から読み取れる

位置情報」に関しての反応が大きく、これまでの生活で気にしていなかった生徒が多かったためか、「家に帰って自分のスマホを確認したい。」と感想に記入している生徒が多かった。

2 校内授業研究会での実践等

(1) 第 2 学年 学級活動「楽しいコミュニケーションを考えよう」の実際



本時は「カード分類比較法」を用いて他者との考えの違いについて気付き、今後の行動に活かせるようにすることをねらいとした。

導入では、事前に調査していたネット使用についてのアンケートの結果を提示し、個人の意識のばらつきについて確認した。

次に、5 種類のカード (①すぐに返信がない ②なかなか会話が終わらない ③知らないところで自分の話題が出ている ④話をしている時にケータイ・スマホをさわっている ⑤自分が一緒に写っている写真を公開される) を友達にされたら嫌な順に並べ、友達と比べることで、「嫌なこと」にも違いがあることに気付かせ、トラブルになる可能性を話し合わせた。

また、実生活で起きそうなトラブルの場面を想像させ、その対処法やそうならないための工夫について議論させることで本時のまとめとした。

授業の感想では、「自分はよいと思っても、周りの人が嫌だと思っていることがあるかもしれないということは意識したい。」や「友達だから同じ考えというわけではないと感じた。」等、自分と周囲との差を実感し感想に記入している生徒が多かった。

(2) 全学年 学級活動の時間「いじめ熟議（SNS上でのいじめ）」の実際



本時は、SNSで発信しそうないくつかの文章について、人を傷つけたり、勘違いによるトラブルが発生したりしてしまうかもしれないという視点を基に、いじめの原因と関連付けて考えることをねらいとした。

まず始めに、A～Eの5つの文章についてSNSで発信しても「よい・悪い・悩む」の3つに分類させ、その理由などをグループで話し合わせた。グループの中で意見が分かれたものについて話を進めていく中で、生徒たちから「ここまでは大丈夫」の基準の違いが人を傷つけることにつながり、いじめになってしまうかもしれないという声が聞かれた。



次に、いじめを生まないために注意すべきことや工夫できることを考え、発表させた。「人の気持ちを考えて、

発信する内容を注意する」「ネットの影響力を考える」「誤解を生んでしまうような言葉を使わない」「日本語を正しく使う」など様々な意見が出された。中には、「だれにも見られない『愚痴アカウント』を作成して、そこで思ったことを書く」というような、自分の心の整理やストレスをためないようにするための工夫も見られた。

授業後に生徒会から、各クラスの意見をまとめて作成した「県北中アクションプラン」として次の3つが掲げられた。1. 自分の発言を客観的に見る。2. 周りの発言に流されない。3. 自分との違いを意識して、相手の気持ちを考える。これからさらに、生徒たちの情報モラルを高めていかななくてはならないが、生徒たちなりに「自分たちの考えをもち、思考を停止させずに行動していくべき」ということが授業を通して理解できたのではないかと考える。

(3) 研究協議会の様子

○ 講師：一般社団法人 教育のための科学研究所 上席研究員 目黒 朋子 様

講師の目黒先生からお話しいただいたのは大きく分けて3点である。

1つ目は、授業について、人との違いをテーマにしていたのならば、もっと深掘りできたのではないかとということである。前半は、アンケートやカード分類比較法での他人との比較ができていたので、後半は「起こりそうなこと」を考えて一般化させるのではなく、一人一人の「嫌」の理由やグラデーションについて、もっと広げていっても良かった。

2つ目は、情報モラル教育の行い方や意義である。1つの結論やまとめにこだわるのではなく、今、子どもたちが直面している情報社会において、適正に活動するための基礎となる考え方や態度を身に付けさせるための教育を行う必要がある。

3つ目は、我々を取り囲むネット社会において、利便性と危険性を併せもったネットをうまく活用するための必要な力についてである。数あるフェイクニュースに騙されない

「受信する力」や、相手の受け止め方は様々だということを理解して行う「発信する力」、これらを併せもつことが大切であるということ、また、どんなトラブルが世界中で起きているのかについても、実例を交えて教えていただき、基本的な知識を得ることができた。

○ 講師：東洋英和女学院大学 国際社会部 講師 酒井 郷平 様



つてくるとアドバイスをいただいた。

講師の酒井先生からお話しいただいたのは、リスク教育の観点についてである。リスク回避のポイントには「予防」「察知」「対策」があり、本時の SNS についての学習は「予防」にあたり、これまでの実践も踏まえ評価していただいた。だからこそ、今後の「察知」と「対策」についての学習が重要になる SNS 上には、意図的に理由もなく攻撃をしてくる人もいるということ为例に挙げ、「どのようにリスクを察知し」「どのように対処するのか」を生徒に考えさせることも重要だと教えていただいた。その中で、トラブルを回避するためのテクニックやどのようにして被害を小さくしていけばよいのか助言をいただき、今後の校内での必要な取組として共通認識を得ることができた。

Ⅲ 成果と課題について

1 成果

- 第1回校内授業研究会で講師の目黒先生よりアドバイスをいただいたことで、職員全体で情報モラル教育における大切な視点や注意点を学ぶことができた。
- 第2回校内授業研究会で講師の酒井先生から、校内での取組とこれからの指導で必要なことを教えていただき、今後の校内での取組の課題が明確になった。

2 課題

- 職員間で資料の共有や各学年の状況に合わせた機会の設定が必要だという声があった。
- 教員個人のスキルがまだまだ足りていないので、資料や指導法の共有が必要である。
- 保護者が情報モラルについて考える機会がもっと必要である。保護者に授業の感想を求めた所、「ネット・SNSは使わない方がよい」などの意見も複数あり、「どうしたら安全に使用できるか」「どのように活用していくのか」という視点をもつことができるようにしたい。